

## 浴びる絵

私は想像することが何よりも好きだ。

言葉という確かなものではなく、ぼんやりと頭の中に一瞬浮かぶ、シャボン玉のように現れてはすぐ消えてなくなってしまうくらいの妄想。

それは現実というものの中から必ず生まれてくる。

だから私は何枚も何枚もそれが逃げてしまう前に絵で記憶している。

残念ながらそれは自分の心にも長くはとどまってくれないが、季節が変わるように、いや、  
天気が変わるくらい短くて不確かなものだからいい。

それが絵として残ったとき、そこにどんな意味があったかなんて覚えていなくても、  
言葉にならない声が聞こえてくるものであればそれでいい。

生きていて毎日同じということはないのだから、大きい声で何かを話したいときは大きな筆で  
のびのび描きたいし、だれとも話したくない時は細い筆で小さい絵を描いたっていい。

ただひとつ自分の中で決めているのは、心が動いているときに筆を持つこと。

そうじゃなければ意味がない。

それは嬉しいときかもしれないし、悲しいときかもしれない。

世界はたくさんのきれいな色と、そうじゃない色でできている。

だからこそ、ほんの少しの真実に人は心を奪われる。

私はいつも絵の中で物語を見ている。

映画のカットをいくつも編集してつなげ一本の作品にする感覚に近いのかもしれない。

それは完璧な嘘であるが、その世界にも必ず真実はある。

映像には時間を伴うが、絵は前後がないだけ、全く違う想像を繰り返し見ることができるのが  
面白い。

だから今私は絵を描きたいのだ。

今見えている色は、この地球を照らす光である。だから宝石のように美しいのだ。

そのたくさんの光が集まって記憶する。

私にとっての絵は、頭で考えるものでなくていい。

鑑賞するというよりも身を投じるという感覚に近いのだ。

最後の日まで光を浴びるように絵画のまえに立っていたい。

2013年2月  
近藤亜樹